

中学生のための部活動改革  
—好きなスポーツをするために—

東海大学 萩ゼミ B

○森芳 大飛 齋藤 愛 渡邊 順也 渡邊 優津希 飯塚 雄太

## 1. 諸言

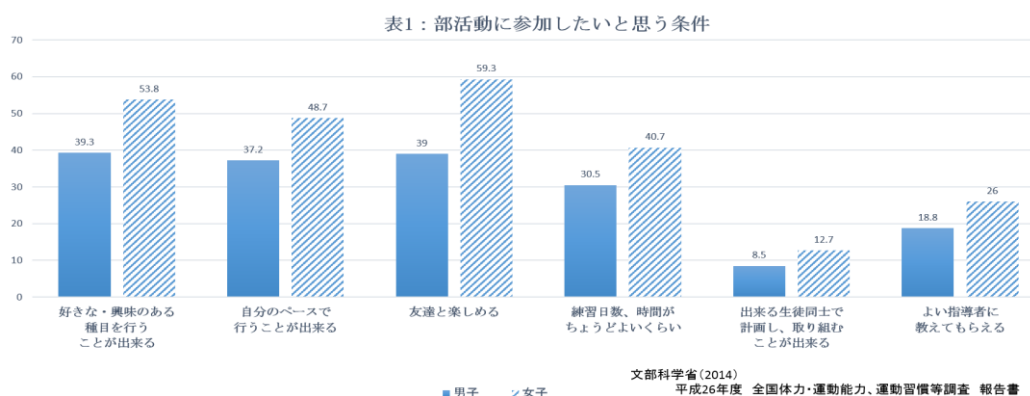
2019年ラグビーW杯・2020年東京五輪に向けて日本のスポーツが盛んになり、子どもたちのスポーツニーズは高まるのではないかと予想した。特に中学生は、真にやりたいスポーツをまだ模索している段階であり、この時期により多くのスポーツ種目を知ることや、実際にそのスポーツを実施することでスポーツの楽しさに触れる必要があるのではないだろうか。しかし、現状では中学生がやりたいスポーツができる環境が整っていないのではないかと私たちは考えた。そこで中学生がやりたいスポーツを行うためには、新たな運動部活動（以下「部活動」とする）における制度、多種目型の部活動を取り入れることが必要なのではないだろうか。私たちはこの部活動の新たな制度を作るにあたり、日本全国には様々な地域があり、その地域ごとにも多様な特色があるため、解決案をここで提言する。

## 2. 現状

近年部活動において、生徒数の減少や、それに伴う教員数の減少により、「部活動に入っていない・入りたい部活動がない」生徒は、全国で約25%存在する。学校側は、生徒たちの部活動のニーズの多様化に応えられていないのが現状である。

では、実際に中学生はどのような部活動に入りたいのか。青少年のスポーツライフ・データ2012によると、「いろいろな種類のクラブに入りたい」という生徒が男子29.8%、女子26.4%という結果になり、この調査の中で上位の数値となった。

また、文部科学省による「運動部に参加してみたいと思う条件」の調査(2014)によると、「好きな・興味のある種目を行うことができる」「自分のペースで行うことができる」「友達と楽しめる」「練習日数、時間がちょうどよいくらい」などの項目が上位であった。



以上のデータから、部活動の種類が少なく、希望の部活動に入部できない生徒や、一つの種目だけでなく複数の競技ができる部活動を望んでいる生徒が多数いることが分かった。

### 3. 提言

#### 部活動管理課を設置

諸言や現状で述べたように、中学生がやりたいスポーツが行えていない現状がある。そのため、都道府県、市区町村で部活動を一括管理する組織をつくり、より中学生が満足する環境を整えることができる。

#### (1) 部活動管理課とは

各市区町村のスポーツ課に配置され、地域の部活動を一括で管理する組織のことである。部活動管理課の運営を行うのは、主にスポーツ課の職員で、中学校と大学・総合型地域スポーツクラブとを連携させるために、各場所に担当者を一人設置する。また、部活動管理課に、中学校は学校ごとに部活動を申請し、クラブチームはチームごとに申請する。その後、クラブチームの代表者は部活動管理課が主催する、月に一回行われる「指導者講習会」に参加し、中学生に教養を身に付けてもらうための指導方法を学ぶ。この講習会には、大学・総合型地域スポーツクラブの担当者も参加し、部活動管理課とそれぞれの場所をつなぐ。更に、部活動管理課は市に一つ、多種目型の部活動を作り、管理・運営する。これは、一つの種目だけではなく、様々な種目を行いたいという生徒のニーズに応えることができる。

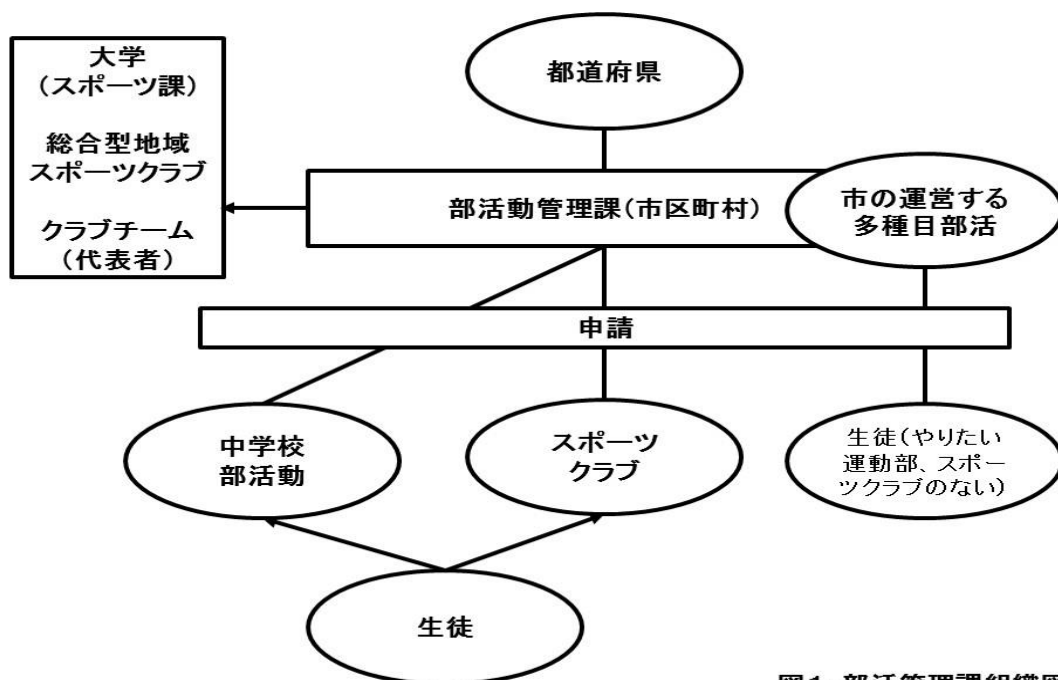


図1: 部活管理課組織図

## (2) 生徒が部活動に参加するパターン

- ① 原則自分が通っている中学校の部活動に参加する。
- ② 地域のスポーツクラブに参加する。
- ③ 近隣の中学校に参加したい部活動がある場合は、管理課に申請後参加してよい。
- ④ やりたい部活動がない生徒は、やりたいスポーツを管理課に申請する。そのスポーツができる環境が整うまで、市の運営する多目的型部活に参加する。(管理課は場所、指導者、人数の確保を行う) 生徒がやりたいスポーツができる環境が見つかり次第、管理課が中学校を通し生徒に連絡する。その生徒は主に大学、総合型地域スポーツクラブなどで活動する。

### ア 大学の使用

現在日本には、775校もの大学が存在する。大学は部活数も多く、マイナースポーツも多くあるため、今まで触れたことがないスポーツと関わることができる。指導は学生が行い、学生の指導の経験の場として利用することができる。大学生と活動したり、指導を受けたりすることで、より専門的な知識を身に付けることや、目上の人との関わり方も学ぶことができるというメリットもある。

例として、東海大学湘南キャンパスをあげる。本大学は全国でも有数の強豪として知られるものから、個性的な部活動まで66の体育会の部活動(2011年3月現在)が存在する。更に、学生がメインで行っている東海大学スポーツサポート研究会(トレーニング部門、メディカル部門、メンタルトレーニング部門)が存在する。この組織は競技力向上や健康増進を目的としてスポーツを行う人に対して、体力の向上、傷害の予防や対策、メンタル面の改善等のサポート活動を行う。これらに所属する学生が中学生に対し、部活動の指導、サポートを行うことで、大学側は指導力向上、大学の宣伝効果が期待できる。また、中学生は質の高い指導やサポートを受けられる。そして、その大学・大学スポーツに興味を持つきっかけにもなる。

### イ 総合型地域スポーツクラブの使用

現在日本には、総合型地域スポーツクラブが3237個存在する。総合型地域スポーツクラブの育成(文部科学省)によると、全国の各市区町村において少なくとも一つは総合型地域スポーツクラブを育成している途中であり、将来的には中学校区の地域に密着しようとしている。そのため、中学生が市の総合型地域スポーツクラブを活用することで、より地域と密着することができる。

また、総合型地域スポーツクラブの問題点として、利用率の確保、財源の確保などが挙げられる。中学生がこのクラブを利用することにより、利用率の増加、部活動管理課からのクラブの使用料などで、財源の確保を期待することができる。中学生は様々な環境が整った総合型地域スポーツクラブで、各々がやりたいスポーツを行うことができ、それを専門的な知識を持ったクラブの指導者から学ぶことができる。更に、同じスポーツクラブを利用する他

の中学校の生徒とも交友関係を持つことができる。

#### 4. まとめ

一つの組織が中学校の部活をまとめることで、クラブチームでも部活動と同等の活動と認められ、より生徒がスポーツ活動に参加しやすくなる。中学生の部活動で、それぞれがやりたいスポーツを行う機会を作るためには、地域とつながりを持った政策が必要であると考える。現在日本にある大学や、総合型地域スポーツクラブを活用し、地域とのつながりを持つことで、中学生がスポーツを行う選択肢を増やすことができるだろう。また、多種目型の部活を導入することで、中学生のニーズに合った部活動を展開することができる。加えて、興味のあるスポーツを実際に体験することで、スポーツに対する先入観やイメージを変え、そのスポーツの特性を知ることでもある。

これらの制度を導入することで、生徒がどの地域に住んでいても希望の部活動に参加できる社会が作れるのではないだろうか。

#### <参考文献>

・小野清子（2012） 青少年のスポーツライフ・データ 2012 -10代のスポーツライフに関する調査報告書-

・課外活動振興協議会（2007）部活動振興基本計画—運動部活動振興に向けた20の提言—  
<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp>

・笹川スポーツ財団 スポーツ白書 2014

・文部科学省：総合型地域スポーツクラブ

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/club/main3\\_a7.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm)

・文部科学省：総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル 参考資料-1 「スポーツ振興基本計画」の概要（1）（平成28年4月1日現在、公立大学について）

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/club/070.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/070.htm)

・文部科学省（2012）平成24年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査 集計結果

・文部科学省（2014）平成26年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査 報告書

・文部科学省：平成27年度総合型地域スポーツクラブ育成状況調査

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kouritsu/](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kouritsu/)